

月刊であるデンタルダイヤモンド誌上に「作法シリーズ」の連載がはじまったのは、1995年のことである。2009年の現在でも、テーマを変えて続いているので、14年間のロングランということになる。

当時、私はデンタルダイヤモンド誌の編集委員で、委員会では提案させていただいた案が採用されて、連載がはじまったと記憶している。一番初めのテーマは「私の原稿作法」であった。この時は、あまり先のことなど考えずに、とにかく1年間、いろんな先生から原稿執筆の極意や苦労話を聞きたいというのが本来の希望であった。

そのきっかけは、長女が1992年に日本歯科大学に合格して、その入学式での学長先生のスピーチに感動したことである。その中で先生は「社会を啓蒙するスペシャリストの一員になりなさい。臆せず、社会に自分の意見を発表できる表現力と文章力をつけ、卒業するまでに自己表現のできる教養人になりなさい」と話された。このお話に、私は大変感動を受け、書くことがうまくなりたいと思うと同時に、いわゆるプロが原稿書きに苦労し

ている裏話などにも興味を持つようになっていった。

例えば、男女の物語を得意とする作家の渡辺淳一の話。「作家がホテルに缶詰になって原稿を書く」という話があるが、あれは嘘だ。ホテルの部屋には必要な小道具がそろってないし、だいたい電話がベッドサイドにあるので、一度電話を受けるとそのまま横になってしまっただけで仕事に戻りにくい」といっような話。ユーモア作家の筒井康隆は、「小説の発想はどこで湧くのか」と聞かれて「いろいろあるかもしれないが、やっぱり締切日だよ」と答えた話。

こういう話などを読むうちに、私たち歯科医の中でも、自分の臨床や考え方を、雑誌に書いたり本にしているような先生方は、何をどのように考え原稿にしていくのか、とても知りたくなったのである。それが編集委員会に「私の原稿作法」の連載を提案した理由であった。

14年間のものをまとめてみると、今さらながら、すごい先生方が書いてくれたなあというのが実感である。そして初めの頃のものを読み返してみてもまったく古い感じがしていない。それはこの連載に表現されているものが、単に執筆者の原稿の書き方や講演のやり方ではなく、その先生の人生観や歯科に対する考え方であるからだろう。一気に書き下ろされた1冊の本も、勢いがあったおもしろいが、このように年月をかけてできあがった本は、ほどよく熟成された高級ワインのように、たまたまなく切ない渋さを持っているようだ。この「作法シリーズ」、なかなかよい味をした本であると思っている。